

過去をひきずりながら前進する人間

——保育のひとこまで考える——

津守 真

一日保育をすると、本を一冊読んだような満足感があとに残ることがある。どんな風にストーリーが展開するのか、最初のうちは分からないが、しばらく子どもと共に過ごすうちに、その子の世界がみえてくる。

電車を手で動かす

その日四歳のT男が部屋に入ってきたとき、私だけしかそこにおらず、私ははじめてその子とつき会うことになった。馴れない子どもというためらいはあっても、そういう機会を積極的に受けることから保育ははじまる。

T男は玩具棚から電車を手にとったので、私は電車の籠をおろしてあげた。

T男は落ちていたレールに電車をのせた。私はレールを円くつなげると、T男は電車を手で動かした。私が電池で動く電車をレールの上においたら、T男は直ちにそれを払いのけてしまった。自分の手で電車を動かすことがこの子には大切なのだった。自動的に動くものが多い現代に、自分の手で動かすことを選ぶことに私は健全さを感じた。

電車をつなげる——連結部の危機

そのうちにT男は手で動かしていた電車に別の電車をつなごうとした。うまくいかなくて私につなげてくれと頼んだ。

母親が用事があるから外に出ると声をかけた。そのときにはもうT男は私と電車をやる気になっていた。床の上の電車に目を近寄せ、身体をかがめて、T男と電車だけが対面しているようで、他のことは眼中にないみたいであった。「つなぐ」と言つて私に電車の連結部をつないでくれと要求した。電車の連結部は、前部と後部と形が違つていて、方向が逆だとうまくつながらない。私が電車の向きをさかさにして連結しようとするとう男は気に入らない。うまくつなげるには緊張を必要とした。電車の連結部がこの子にとっては危機をはらんでいるように思えた。私は苦心して電車をつなげることに協力した。T男は長くつながつた電車をゆっくりと動かす。

電車をとり合う——身体による仲介

そうしている間に、別の子どもが来て、この電車のひとつにさわった。T男は大声を出してわめいた。そこにある電車は全部自分のだというみたいだった。丁度そのとき部屋に入ってきた母親を激しく叩き、その様子を相手の子どもは驚いて立ちすくんだ。こんなときには、大人がどんなことを発しても、気慰めにしかならないことが多い。むしろ身体を通して分かり合う方法を考えるのがよい。私は二人の子どもの間に首をつっこみ、体を触れ合い押し合いながら、二人の子どもの連結部になろうとつとめた。身体の息吹が感じられた。そうしている間に、二人の間にゆずり合う気配があって、それぞれに自分が遊んでいた場所にもどっていった。T男はまた電車をつなげて、レールの上を手で走らせた。

先頭からしっぽまで——過去をひきずりながら前進する人間

電車は九台つながっていた。T男は先頭のに手をかけてゆっくりと動かすが、先頭の電車がトンネルを出ても、最後尾はまだトンネルの外にある。T男はゆっくりと注意深く先頭の車を動かし目を床につけるようにして、最後の一輛がトンネルを出るのを見つめている。私はつながった全体がこの子の自分のだろうと思った。自分の中でいろいろのことがつながり、いろいろの人がつ

ながっている。いろいろの過去がつながり、つながっているものに思いを残しているのだろう。つながっているものが未来に向かって動いてゆく。気持ちが残っているものをひきずり、緊張をもって前進する。その全体が自分である。

私は先頭の電車のとり合いを思い出した。この子は他の子が電車に手を触れたとき、自分自身を侵されたように感じた。その悔しさや、そのほか私には分らない。この子が過去からひきずっている感情があつて、母親に激しくあつたのだらう。人は現在を生きながら、その中で、さまざまな過去の思いにひきずられている。その部分が過度に膨張すると、現在を十分に生きられなくなってしまう。

T男は長くつなげた電車の最後の一台までトンネルから出るのを目で追うことによつて、自分の心の中にひきずっていた何ものかを認識することができたのではないかと思う。言語によつてではなく、このような遊びによつて子どもは自分自身を認識する。私はそんなことを考えながら、長く連結した電車がひっくりかえらずに、無事にトンネルを抜けるように、少しでも手をそえながらT男につき合っていた。

子どもは一日を完結させる

二時半ごろ、子どもたちは家に帰っていった。そのあと、いつものように私

共はお茶をのみながらその日のことを話していた。

すでに四時ごろだったのに、庭でT男の声がしていた。その子は母親と、一人の職員と一緒に庭で遊んでいた。滑り台の下から、母親と先生とを登らせ、自分はその後について上がり、向う側の階段からおりてくるのを何度もくり返していたのだという。階段には屋根があって、丁度トンネルのようになっていゝる。こんどはほんものの人間を連結させ、自分が最後尾になって、電車遊びと同じことをくり返していたのだ。電車よりもっと現実のレベルで、自分の中にひきずっている感情を、形にして認識した。そこまでやらなければ、T男にとってこの一日は完結しなかったのだろう。

朝、子どもとつき合いはじめたときには、何か分からなかったことが、一日終えてみると、はっきりと見えてくる。こういうことは稀ではない。一日保育をすると、子どもを通して人間が生きる姿を見せられ、考えさせられる。

*

この子どもは週二日だけ来ているのだが、この日のあと、毎回、違う保育者と違う遊びをしている。一回ごとに成長してゆくのがわかる。その次の日には、レールではなく、ホールに並べてあった箱積木の上を、自分も大きく動き

ながら電車を走らせていた。その後は電車を連結する遊びはしていない。人との間の連結部の危機は通り過ぎたようである。あのとき、夕方まで遊んでいったとき、自分がひきずっていた思いについても、何か解決したことがあったのではないかと思う。

(愛育養護学校)

